

平成 27 年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

所属	EDAYA		職名	co-founder		助成金額	20万円
氏名	山下彩香	印	メール アドレス	yama.ayaka@gmail.com			
研究課題（申請書に記入した内容を記入すること。）							
フィリピン・山岳先住民族カリंगाの竹楽器とその音楽の実態調査と現地での継承・普及							
助成金使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。）							
<p>1. はじめに</p> <p>EDAYAでは、フィリピン・山岳先住民族カリंगाを対象として、失われつつある竹楽器の調査や、伝統あるいは無形文化に対する人々の意識調査を継続的に行っている。2012年12月～2013年1月には、竹楽器調査をカリंगा州バルバラン市とパシル市で実施し、2014年12月及び2015年3月にはパシル市バリンシヤガウ村で意識調査を行った。それらの結果はEDAYA JOUNEY展 vol.1 (2013年3月開催) vol.2 (2015年5月開催) として日本で発表した後、カリंगाに持ち帰り、巡回展ならびに竹楽器・文化教室の開催という形で現地に還元してきた。今回は、カリंगा州ティングラヤン市とタヌダン市という2つの新たなエリアに挑戦することを決め、竹楽器調査と人々の意識調査に臨んだ。</p> <p>2. 調査内容/行程</p> <p>2016年11月、ティングラヤン・タヌダンを訪れ、12日間の現地調査を行った。無形文化である竹楽器が現在の程度残っているかをヒアリングし、残っていた場合その用途や実際の演奏を記録した。また、村の人々の文化に対する意識についても積極的に聞き取りを行った。</p> <p>11/7 フィリピン・ルソン島北部にある地方都市バギオから、カリंगा州の州都タブックへ移動。 11/8 タブックにて、ガイドと行程確認を実施。School of Living Tradition という政府の取組みへのヒアリングも実施した。 11/9 タヌダンへ移動。途中、市長への挨拶や市の基本データ（各村の人口や世帯数など）の収集等しつつ、中継地点までバイクで移動。 その後は、橋のない川を胸までつかり渡るなど困難な箇所も超えつつ、半日に及ぶトレッキングを経て、ガアン村とダカーラン村に到着。 11/10 午前中のダカーラン村での竹楽器制作のあと、ルボ村へ移動。 11/11 マガリ村を調査。マガリ村は他の村と比べて集落が大きく、アンガカンという集落を中心に調査した。 11/12 タロクトック村を調査。夜に歓迎会を開いてくれ、竹楽器や踊りも披露してくれた。私たちがカリंगाの衣装を着て、踊りを教えてもらった。 この村はJICAプロジェクトで道路が開通したため、日本人へ好感を持ってくれており調査しやすかった。 11/13 半日間のトレッキングののち、最後はバイクでタブックまで移動。 11/14 タヌダン調査のまとめと、ティングラヤン調査の準備。 11/15 ティングラヤンでの調査を開始。マラゴ村を調査した後、スマデル村へ移動。マラゴ村ではキリスト教の影響の強さに衝撃を受けた。 11/16 午前中はスマデル村の小学校で文化交流の授業と竹楽器の調査を実施。バサオ村で調査。1606 段の階段を登りきった先に村がある。 11/17 午前中のバサオ村での調査ののち、ティングラヤン市中部へ。ティングラヤン市庁舎を訪れ、挨拶をするのと同時に、近くの村ルブルバを調査。 11/18 タブックへ戻り、調査のまとめ。バギオへ移動。</p> <p>3. 現在の状況</p> <p>現在は調査結果をまとめている段階だが、これまで調査してきた2地域とは全く違う状況が浮かんできたのが非常に面白かった。今回訪れた2地域に関して、事前情報からはカリंगाのどの地域よりも文化色が強い印象をもっていたのだが、実際はシャーマニズムの衰退により竹楽器が意味性を失い、音楽を楽しむ用途に使われていることの方が多かった。調査結果のアウトプットの方法に関しては、これまで通り展覧会にすることも可能だが、第1回～3回までの調査内容を比較する形で、写真と文章をいれた図録とし、現地へは教材にしてもらうことで還元するという方向性も考えている。</p>							
助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合は URL を記載すること。）							
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)				
発表準備中							